

世界を舞台に活躍する医療NGO

日本における医療NGOの草分け的存在、AMDA。ODAとの官民連携活動にも積極的に取り組んでいる

悔やまれるルワンダPKO派遣中止

一九九七年二月中旬、ルワンダ派遣を目前にして準備に追われていた山本秀樹AMD A (アマダ・アジア医師連絡協議会) 副代表らのもとに、国連平和維持活動(PKO)に基づく平和協力隊派遣中止の知らせが飛び込んできた。

九四年のルワンダ内戦後、旧ルワンダ政府軍・民兵を多数含む二〇〇万人ものフツ族難民がザイル、タンザニアなど周辺国に逃れ、難民キャンプでの滞留が長期化していた。しかし、九六年九月以降、ザイル東部でザイル軍とバニヤムレンゲ(ザイル東部のツチ族系住民)を中心とするザイル反政府勢力との戦闘が激しくなり、一月半ば、キャンプ内での生活が難しくなった大量のルワンダ難民の本国帰還が始まった。



ルワンダ北部の病院にも出かけて行き、難民患者を診察した



94年、ザイル・ゴマの難民キャンプで地道な診療活動続けるAMDAスタッフ

国連安保理では帰還する難民の保護と人道支援を目的とする多国籍軍の派遣実現に動きだしたが、難民の帰還は予想されたより急ピッチで進み、ルワンダ政府も軍の派遣より帰還民への支援を要請してきたため、本格的な多国籍軍の派遣は見合わされることになったのだ。

早くから帰還難民救済の対策を準備していた日本政府は九七年初め、独自に帰還民の定住支援のために民間人を主体にした平和協力隊の派遣を準備、ルワンダ平和協力隊はいつでも出発できる態勢が整っていた。その協力隊の主力となるはずだったのが医療NGOとして近年、国内外で目覚ましい活動をしている「AMDA」。ルワンダ平和協力隊は山本副代表らAMDAのメンバー三人(医師五人、看護婦三人、レントゲン医師一人、検査士一人、調整員二人)のほか、日本の二つのNGO、「難民を助ける会」(九

人」と「アフリカ教育基金の会」(三人)、それに外務省、総理府からの政府職員五人、計三〇人で構成されることになっていた。

AMDAは九四年のルワンダ難民緊急援助の際、ザイル東部のブカブで医療キャンプを単独運営、また同年、ルワンダの首都キガリで病院再建プロジェクトを手がけるなど、ルワンダの医療援助に実績を上げている。それだけにAMDAに対する期待も大きく、ルワンダ平和協力隊が派遣された際はルワンダ南部のカドゥーハで病院再建などを任せられ、二月末には一三人が任務に就くことになっていた。急に派遣が中止されたのはルワンダの治安が悪化、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)など国際機関が活動を縮小するなかで、民間人だけの派遣は危険になったためと説明されている。

中止の理由はともかく、ルワンダ平和協力隊はNGOを主力にした世界でも珍しい救援計画だっただけに、派遣中止を残念がる声は強い。

「国連によるPKO参加とは異なり、日本がNGOを主体にした平和協力隊を派遣することは、手続きが簡易になり、現地の事態に即応しやすい。それに身軽に動ける利点がある。今回の平和協力隊派遣は、日本の国際貢献を世界にアピールするよい機会だっただけに残念です」とAMDAの菅波茂代表は、せっかくのチャンスを失ってがっかりしている。

ODAとの連携を図る「オダンゴ」プロジェクト

とはいえ、世界を舞台に活躍するAMDAには、いつまでもがっかりしている暇はない。九六年一月から八月までの八カ月間だけで、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南米に二六もの医療プロジェクトを派遣した実績を持つAMDAは、緊急支援を必要とする状況がいつ世界のどこで発生するかかわからず、常に援助隊発進の準備をしておかなければならないのだ。



96年5月、バングラデシュで大規模な竜巻が発生。被災民を救うため、AMDAの緊急医療チームが急行した

AMDAは九七年四月、国際協力事業団(JICA)と協力してザンビアの首都ルサカで「首都圏プライマリー・ヘルスケア」プロジェクトを始めた。このプロジェクトは首都圏の低所得地区に住む人たちの保健環境を改善するのが狙いで、AMDAは大半の人材を供給している。

日本のNGOはこれまで、政府開発援助(ODA)に対し、批判的な団体が多かった。しかし、AMDAは独立性を保ちながらもODAに積極的に

AMDA

(アジア医師連絡協議会)

1979年、タイに逃れたカンボジア難民救済に加わった1人の日本人医師と、2人の医学生が中心となって帰国後に開いた「アジア医学生会議」を母体に84年に設立された。

その後、国内外に拠点を拡大、現在はインド、カンボジア、スーダンなどアジア、アフリカ、南米、北米27カ国に支部を持ち、支部には緊急救援医療部門としてアジア多国籍医師団(AMMM)がある。海外では緊急医療支援、地域の保健医療、国内では在日外国人の医療相談などの広い活動を続けている。

93年のソマリア難民支援、94年のルワンダ難民緊急援助、95年のサハリン北部地震緊急援助などのほか、同年の阪神・淡路大震災ではいち早く現地に到着、海外での経験を生かした救援活動を行なっている。93年に外務大臣賞受賞。95年は「読売国際協力賞」と「毎日国際交流賞」を受賞。同年6月、国連NGO諮問資格カテゴリーⅡに認定。会員数は国内約1500人、海外約300人(99年12月現在)。

●連絡先●

〒701-1202 岡山県岡山市榎津310-1
TEL : 086-284-7730
FAX : 086-284-8959
URL : <http://www.amda.or.jp/>
代表 : 菅波 茂



戦禍で傷ついた市民を救うため、現地に急行(96年5月、レバノン)

協力しているという基本方針を持っている。ODAとNGOをつなげて「ODANGO(オダンゴ)」とも呼ばれるプロジェクトが最近、いくつも見られるようになっていくが、ザンビアプロジェクトのように、NGO(AMDA)が企画の段階から参加するODAは初めての試みだった。

九五年にJICAからAMDAにこのプロジェクトが持ち込まれたとき、ODAが作る病院施設など、いわゆる「ハコもの」と、NGOが持っているコミュニティレベルの人と知識のネットワークを連動させる絶好の場と、即座に引き受けた。

「JICAは現地のカウンターパートに技術移転さえすればその後、自然に末端までその技術が流れると思っている。だが、それは違う。途上国では技術移転のシステムが完全ではないので、技術はなかなか末端まで流れにくい。だから、今度のプロジェクトではローカルNGOなどと協力して最初から個人、家族など末端をターゲットにして、貧しい国の人たちの健康水準の向上を目指していく」と菅波代表は熱意を燃やす。

AMDAはこれからの主要なプロジェクトとして、海外では貧困層への小規模融資を行なうバングラデシュのグラミン銀行との連携、バングラデシュとネパールでの「国際ボランティア訓練センター」設立、国内では岡山に国際開発大学設立構想、地方NGOのネットワークづくりなどを発表している。活躍の場は広がるばかりのようだ。